

茂山久蔵英政と鏡師青家

関 屋 俊 彦

はじめに

狂言師茂山千五郎家八世の久蔵英政について、十世の千五郎正重（二世千作）は「分っている限りでは、久蔵英政は元禁裏御所の御鏡司で本名を青酒造介と言ひ、七世茂山源兵衛を継いだ事になって居ますが、この源兵衛も岡崎本多家の浪人とだけしか分つて居ず、その先祖に至つては何等伝わる處がありません。先年来大阪の茂山弥五郎さんが色々と調べて居られますが、どうか一日も早く詳しい事が分つて、祖先のお祭りを致したいものだと思つて居ります」

（茂山千作 狂言八十年 昭和二十六年九月、都出版）と述べておられる。十世は昭和二十五年になくなられ、今の四世千作さんにお墓のことを直接お尋ねしたこともあるが、やはりわからないのとことであつた。狂言の研究者を含めて、菩提寺のことについては誰も今まで調べきれなかつたようである。

かく言う筆者も以前「狂言師茂山久蔵英政伝一斑」（関西大学

『国文学』第六二号、昭和六一年二月。のちに拙著『狂言史の基礎的研究』平成六年三月所収、和泉書院）として考察したことがある。主として『花咲伝』などの彼の伝書の書誌と、出演記録を中心としたそれは久蔵英政が最も活躍した時期を考へてみたものである。そして、その時は茂山千五郎家所蔵の「大蔵流大儀大事」に久蔵英政が禁裏御用の鏡司青酒造介であると伝えられていることについては、同書が二重表紙になっていることもあり、青家との関わりについては疑義があるとして否定したことがある。しかし、それに代わる案が出るでもない。先の『茂山千作 狂言八十年』を読み直してみてもう一度、茂山久蔵英政と青家の関わりについては再考する余地があると思ひ、過日、菩提寺を探ることから調査をやり直した。

その結果、墓の所在が判明し、のみならず茂山と青家はやはり関係があるということ、さらには鏡師の家として田原本町の鏡作神社とも関係があるということまでわかつたので、報告に及びたい。

一、過去帳と「花咲伝」

茂山久藏英政を考える上で、茂山千五郎家所蔵の無題『過去帳』（以下『茂山家過去帳』と称する）と文化三年（一八〇六）に久藏英政が著した『花咲伝』に記載される自叙伝は貴重である。それぞれ「狂言師茂山久藏英政伝一斑」で引用したことが、四世茂山千作氏のご厚意により再確認したものを若干の訂正を加えた上で、もう一度転載する。

まず、『茂山家過去帳』の方であるが、茂山千五郎家は佐々木甚兵衛次男の千吾が大藏流二十世家元の弥太郎虎文の勤めで茂山家に養子として入り、九世千五郎正虎（明治十九年、七十七歳没）と名乗ったものであるとされる（茂山千作『狂言八十五年 茂山千作』昭和五十九年、淡交社など）。すなわち、千五郎正虎のちに井伊大老（直弼）に見込まれ彦根藩家臣となったことに象徴されること、現在の茂山家では井伊家家臣であったことを大事にされている訳であるが、まさしく『茂山家過去帳』では佐々木姓から始まり、千五郎正虎との前後にはさまれた久藏英政の記述はある意味では唐突に独立して書かれているようにも見える。

次に、その久藏英政の項をあげる。なお、読点は統一して任意にうち、（ ）は筆者注である。（ ）は朱書。

〔融誉〕 釈道圓 文政四年辛巳年六月廿六日、於中山火葬、西大谷

納骨、自元祖八代目茂山久藏英政、行年八拾二歳、禁裏御鏡師、本姓青造酒介ナリ、三州岡崎城主本多中務大輔、浪人茂山源兵衛相統、大正九年三月廿八日、嵯峨釋尊ニ於テ五重相伝執行有之、百回忌相当ニ付、贈相堂〔融誉〕、

先に、筆者は「狂言師茂山久藏英政伝一斑」の論考で、この『茂山家過去帳』は「大藏流大儀大事」をもとにしてしているとしたが、『茂山家過去帳』の記述は正確で基礎的資料となると訂正したい。

それに伴い、久藏英政の出生について、諸文献より四説すなわち、A元文五年（一七四〇）、B延享二年（一七四五）、C延享三年（一七四六）、D延享四年（一七四七）を紹介し、D説をとったが、それもAの元文五年出生が正しいということになる。

次に『花咲伝』を引用する。同じく読点は統一して任意にうち、誤植は訂正した。

我等九才之時より狂言まなひし所、師たる遠藤金藏相果被申候、于時、我十五才なり、門弟多ク有之候へども、師たる者うせしにより、芸道是切と門弟治定仕たる所、紀州松井市太夫、関東倉谷武右衛門、上京に付、我等ハ上手森川栄介殿へ預ケ被申候、又、松本彦四郎は山川正九郎殿へ預ケ、和田正藏ハ上原友九郎殿格別心安中故、其方へ相談ニ被參候、千田金介、藤木他吉ハ森川氏へ相談と相成候処に、右上手栄介殿無程死去被致、

夫寄名人松井市太夫殿ニ御世話ニ相成、其後、様子有之候付、

関東へ罷越、大上手倉谷武右衛門殿方に居候と相成、執行仕候事三年之あいた也、夫婦京仕候へ共、又、様子御座候て、芸道相休候事、凡二十五六年也、然る所、安田吉左衛門相果被申候ニ付、もはや流儀相立候者、京都に一人も無之、其時、我已前之事思出し、関東師家之御世話被下、倉谷氏長ニ御やしない被下、其上芸道極之事も被仰候ニ、此儘にむなしく仕候ては神文の恐有、又ハ師家之手前カ相済不申、外ニ相続人無之、不殘古人と相成、残し者ハ我壱人、相手なけれハ如何せんと思ふ折から、岡村千蔵殿御す、めにより、釜座下立壱上ル丁ニて小借家かり、誠に少心と申も恐也、つたなき芸ながら稽古場相立候處に、せけんハひろきものにて、出世かちとやら申習にて、段々門弟あつまり、我等なからふしきをなし候か、(中略) 于時文化三歳卯春 当歳六十一才也 茂山久蔵 英政(花押)

『花咲伝』で見る限り、久蔵英政が青姓であったとか鏡師であったとかの記述はない。しかし、彼には狂言から離れた時期があり、それが二十五・六年であったという。それが大げさな表現であったにせよ、かなり長い空白であったことは確かなようである。その間なにをしていたかと、やはり別になにか職業についていたと考えるのが妥当であろう。

二、墓地の所在

茂山久蔵英政の墓地の所在であるが、『茂山家過去帳』には「西大谷納骨」とあり、これは古川久・小林實・萩原達子編『狂言辞典 事項編』(昭和五十一年、東京堂)の「茂山久蔵英政」の項に「墓地、京都市東山区・大谷本廟」として既に採用されている。しかし、実際の西本願寺大谷本廟はまさに墓累々であり、『茂山家過去帳』以上のことは調べられることはなかったものと見受けられるし、実際、今まで誰も大谷本廟に問い合わせられた形跡はなかった。筆者もいったんはあきらめかけたが、どうにも引つ掛かるものが残り、大谷本廟宛に手紙を差し上げたところ、実に幸運なことに大谷本廟より茂山姓では出てこないが、法号の「道円」が青家の墓碑銘と一致するとの回答を得ることができた。詳しくは伺っていないが、大谷本廟では墓碑銘のコンピュータ化が進んでいるのではなからうか。ある個人の法号を見つけ出すのは数年前なら不可能な作業であったであろう。その上、筆者にはなんとなく茂山の方が本姓であるとの思い込みがあったので、今までの調査の迂回をさせてしまったようだ。少なくとも久蔵英政にとつての茂山はあくまで藝名で、青が本姓である。いずれにしてもこうして大谷本廟第十二区百三十五号地にある墓の所在を確認できた。墓は平成六年七月に建て替えられたのであるが、幸い大谷本廟の御厚意により、それ以前の墓の

写真を手に入れることができた。写真では不鮮明な部分や、わからない箇所も、のちに青家現当主の敬之氏（箕面市御在住）により、

墓碑銘は次の通り記されていたとの確認がとれた。

（正面）

先祖 永正尼
永順尼

智栄
覚替

浄真
智春

妙智
妙貞

釈

道樹
永壽

宗壽
慈照

淨念
妙智
教膳

智心
智円

青氏

（裏面）

大久保氏先祖代々

（右側面）

鏡岸恵明信女

妙玄

智譲

妙盈

道円

教誓

智順

正道

貞淳

體豊

喜応

淨晚

信澄

軀明

道悦

妙幸

智讃

英真

（左側面）

藤木氏

青氏

金田屋

文化九千申年八月建之

右側面に刻まれた「道円」が「茂山家過去帳」の青酒造介すなわち久藏英政の法号に当たるわけである。墓の建立の時期は文化九年で、これは久藏英政が七十三歳の時に該当する。久藏英政自らが建立した可能性が高い。尤も、大谷本廟から提供を受けた文化九年当時の墓の写真では右側面は写されていない。もともとなかったもので、久藏英政以後の方々の法名が次々と刻まれていったものと思われる。青敬之氏の御教示によると、右側面に信澄とあるのが養子入籍された富三郎氏のこと、妙幸はその妻、英真は敬之氏弟だということである。左側面に建立者の名前が三名列挙しているが、その中で「藤木氏」とあるのは、あるいは「花咲伝」に記されている久藏英政の兄弟弟子である藤木他吉かその縁者であるかも知れない。なお、富三郎氏の時に養子入籍されたこともあり、現在の青家で御所蔵の過去帳は近代以降の法号が記されるばかりのものである。又、裏面に刻まれた「大久保氏先祖代々」とあることについては気になるところだが、今後の課題としたい。

二、青家文書と茂山

大谷本廟に実際に青家の墓があったことがこれで確認された訳だが、建立された青氏がすぐわかったわけでもない。昨今の事情で、大谷本廟から住所を直接教えてもらった訳ではない。幸いが重なり、箕面市在住の青敬之氏が本人であることが確認でき、ご自宅を訪問できたのは後日のことである。次に青家文書について略説する。

青家はまさに御所御用の鏡作りとしての歴史を持つものであった。残念なことに虫損の甚だしい古文書・烏帽子を入れた装束の行李数点は処分されたそうであるが、それでも閲覧できた資料数十点のほとんどが実際に鏡作りに関わるもので貴重な未紹介の資料であった。たとえば、一枚もので裏書きに「伝曰人皇九十九代後小松帝御辰筆御拝御鏡真絵」とある後小松天皇に献上した鏡の控え書類（図面）は周囲が恐らく唐織の端切れで装飾されていて、これが時代的には最も古いものと思われる。鏡の実物そのものは裏面に「大正四年十一月御奉行御大札御大札御用 高御座頂上御鏡 大正参年八月調進写 青盛嗣」とある円鏡とほかに柄鏡各一面が伝わる程度である。

又、何うと青家では最も大事な伝書は京都の稲垣家に預けたとの伝承があるが、それは青家の次のような文書と一致するものである。青家の資料目録と言ってもよい、同家の概略を知る上で重宝なので、ここに紹介しておきたい。

記

- | | |
|---------------|----|
| 一、青家代々書記巻物 | 三巻 |
| 一、金田屋古書 | 壹枚 |
| 一、御拝借金上納通 | 壹冊 |
| 一、由来書巻物 | 壹巻 |
| 一、家宝帳簿 | 壹冊 |
| 一、御即位御用帳簿 | 壹冊 |
| 一、鏡仕様并二入用道具帳簿 | 壹冊 |
| 一、御鏡座勘定書 | 壹冊 |
| 一、吹屋定書・磨書定書 | 二冊 |
| 一、後小松院御鏡図 | 壹冊 |

一、拾点

明治十三年五月十九日

右之物品立会之上、稲垣氏江

相預ケ申置候也

立会姓名

- | | |
|-------|-----|
| 稲垣孫兵衛 | (印) |
| 石田清兵衛 | |
| 藤森守典 | (印) |
| 中部小兵衛 | (印) |

明治になり、いったん青家は途絶え、家の資料は稲垣家に預けられる事実があったかも知れないが、先に紹介した「後小松院御鏡圖」など現在の青家に所蔵されている資料の何点かが右の目録とも合致するので、富三郎氏の時に青家に養子縁組みされたという話からして、青家再興の時に資料は返却されたものと、今は考えておきたい。一点ずつ確認した訳ではないので、京都の稲垣家、墓の建立者のひとりである金田屋ほかの人物について調査をする事を含めて今後の課題としたい。いずれにしても青家御所蔵の鏡文書は古鏡を研究する上で貴重な資料となるであろう。鏡については筆者は素人であるが、従来の研究書を概観しても、鏡そのものについての研究に比べて鏡を作った人についての研究は進んではないのではあるまいか。青家が御所御用の鏡師で、資料を通観しただけでも多くの人と関わりを持っていたことがわかるだけに、近世文書がほとんどとは言え、当時の御所を中心とした状況を垣間見る貴重な資料ともなるであろう。

さて、青家の資料が鏡の歴史を考える上で貴重であることは一目瞭然なのであるが、当面の目的である確実に青家と狂言との関わりがあると指摘できる資料は数少ない。その中で、文政三年（一八二〇）青酒造介が八十歳になった祝いを御所で行なってもらった資料に注目してみたい。文政三年は久蔵英政の実年齢に当てはめると八

十一歳となり、それは彼が亡くなる前年のことである。青酒造介にとって、この御所での祝いはいまことに晴の場であって、このことだけでも詳細な記録を残している。又、青家に家宝として伝来している書の額も「八十の翁」とあるので、この時のものに違いない。

まず「八十賀二付、御祝義、其外振舞等控」であるが、お祝いとして浦島の絵や扇子・酒、各方面から金子などをいただいている（残念ながら、浦島の絵や扇子は失われている）ことが記されているあとに、次のような歌が記されていることである。

一、天君江 神前と思ひ初穂をさし上る

雀山

茂山を森と存知

八十賀を 八十を下からよめハけふよりハ

祝ふて 千代もちぎらん十八の公

右たんざく二枚也

茂山氏が大人家二到をも

小花屋善兵衛様より

ゆるさる、賀年なりとて心は

式朱

やんことなきお、ん恵ミに

あへりけるは誰かこれを

うらやまさらんやされハ親族の

人々をはしめおの／＼壽きの

集へるあれハと下官にもなを

乞はる、より無恒の産に

おもひ寄せて猶行末をも

祝し述る

たか、らぬ願や齡ひも満寿か、美

催風庵 句

右の文中で「小花屋善兵衛様より 式朱」とあるのは、前の文でさまざまな引き出物を頂戴しているリストで書き切れなかった部分をここに書いているものであつて、さし当たっては無関係である。ところで、最初の短冊に書かれたらしい和歌の詞書にある「茂山を森と存知」とか、次の祝詞にある「茂山氏が大人家ニ到」という書き方は明らかに青が茂山を名乗っていることを知っていなければ出てはこない言い方である。すなわち、本姓青造酒介は茂山久藏英政であると示唆するものである。崔山、催風庵については未調査である。

また、青家文書で、右と同時期の「八十歳賀 献上物諸事之控 青盛重 文政三庚辰十一月」は詳細な祝いの控えて内容的にも興味深いものであるが、文末に次のように引かれている。

一 女御媛御末頃御手元様より

後藤するめ式連頂戴仕候

内 巻連茂山へ遣ス

綿進上之覚

一 金太へ、卅目

一 茂山へ卅目 鶴吉へ貳拾目 万清へ拾匁

メ九拾目也

一 九拾壹匁コミ綿 上綿五拾八匁 下廿六匁

メ百七十五匁

外二茂山へ上綿 銀子壹ヶ遣ス

此目方式百廿三匁五分拾八五かへ

代 四拾壹匁三分七毛渡ス

まことに読みにくい箇所が多いのであるが、「茂山へ」と三箇所にあるのは、これも青酒造介が茂山姓であることを踏まえており、しかも盛重の名を名乗っていることがわかる資料である。以上、二点ばかりの資料ではあるが、少なくとも茂山久藏英政は青酒造介盛重であると断定して差し支えないであらう。

三、鏡師としての青家

この項では鏡師としての青家を考察する。

鏡師の定義を繙くと、『国史大辞典』（昭和五十七年、吉川弘文館）には「鏡師 金工の鑄造の技術によつて鏡の製作にあつた工人。

（中略）実際の鏡の上に直接に作者名を表わしたのは、室町時代末期からで、青家の各人、木瀬淨阿弥らがあげられる。この時代からの鏡の製作者を鏡師と呼んだ。これらの工人は京都に住んで家系は

長く禁裏御用の鏡司として江戸時代までつづいた」となる。

さて、広瀬都巽氏の名著『和鏡の研究』（昭和四十九年、角川書店）には香取秀真氏が発見した『鏡銘寄集』に加えて『鏡師銘記集』として、例えば青姓の者として青家次以下八名の名前を挙げている。それを受けた形となるものと思われるが、小林達雄監修『柄鏡大観』（平成六年二月、刀水社）がある。それによると、「青家次の手による鏡は「天正十六 天下一青家次」の鑄出銘をもつ桐竹鏡（東京国立博物館所蔵）が有名で、白銅質の稀觀の作で後陽成天皇御拝の鏡と伝えられる。青家は家次を宗家とし、禁裏御用鏡師として明治時代まで続く家柄である。今日知られている銘識を名寄せによつて年代順にあげれば青家次（天正年間・京寺町一条）、青光家（同年・同所）、青光保（同所）、青吉保（同所）、青盛富（同所・青酒之介）、青大掾盛重（寛文・弘化に及び数世襲名）、青上総（寛文年間・京都上京区畠山辻）、青杜天正丸盛重（弘化年間）、青和泉守藤原栄信（後期）、青（京都一条南松下町）、青宗次天正丸（榎原都京都一条）である」とあり、累代が明確になっている訳ではない。青家にあつても累代をはつきりとさせるはずの過去帳・釣図は残念ながら失われている。青家の全文書を検討すれば、およその累代はわかるかも知れないが、今それを調査する余裕はない。

さて、『茂山家過去帳』を今一度点検してみる。後半の記述は

「三州岡崎城主本多中務大輔、浪人源兵衛相統、禁裏鏡師、本姓青造酒介ナリ」とある。権藤芳一氏の最近の解説「八世久蔵まで」（『お豆腐主義 狂言・茂山家物語』平成六年九月・茂山狂言会パンフレット）には「先の七世源兵衛も望まれて、禁裏御用を勤めていたのでしょう。寛政期（一七八九―一八〇〇）の禁裏御能の番組にその名が見えているので、このことは確かです」とあるが、寛政期に七世では明らかに時代の矛盾がある。久蔵英政の生年も勘違いされている。それらはともかくとしても、「七世源兵衛は、すでに禁裏御能を勤めている実績があります。ですから、自分のところへ修行に來た青造酒介を、嗣子のいなかった源兵衛の養子とし、茂山家を狂言の家として固めてゆく政策をとつたのでしょう。もちろん源兵衛にも異存はなかった筈です。こうして茂山家八世・久蔵英政が生まれたのです」とあるのはどうであろうか。『禁裏仙洞御能記』（書陵部所蔵）には、『花咲伝』で久蔵英政が狂言を習い始めた以前の元文二年（一七三七）には既に久蔵の名前が見えるし（三月二十七日の《花折》のオモで登場）、なにより『花咲伝』には「我等九歳之時より狂言道まなひし所、師たる遠藤金蔵」とあるのは七世も久蔵を名乗っていたことを如実に示すものである。すなわち、貞享四年（一六八七）版『能之訓蒙図彙』（法政大学能楽研究所編集能楽資料集成）に見られる茂山徳兵衛ともども、青家の者が茂山姓

を名乗って御所御用の狂言を演じていたと見るほうが素直なのではあるまいか。青家の本職は鏡師であり、『花咲伝』で二十五年間狂言から離れていたというが、それはその間にもしなかったというのではなく本来の鏡師としての仕事をしていたのであろう。

次に三河岡崎藩すなわち本多中務大輔家の家臣であったとの言い伝えについては気になるところであるが、主として岡崎市立図書館の『本多家岡崎藩分限帳』など一通りを見てみたがわからなかった。『岡崎市史』によると寛政五年の職制では藩財政が窮乏し、能役者は既に削減の対象となっていた。岡崎藩の資料から調査するのは無理があるかもしれない。思うに茂山家も形式上岡崎藩から扶持をもらう所謂手申楽だったのではあるまいか。和泉流狂言師の山脇和泉家が早くから尾張藩に扶持をもらっていたが実際には京都を離れずに御所御用に専念していたように。

更に先の貞享四年版『能訓蒙図彙』には「本多中務殿 油小路通四条下ル 同（筆者注、大蔵弥太郎） 弟子 茂山徳兵衛」とある訳であるが、平成八年十月二十七日に六麓会で報告を行なった時、『茂山家過去帳』はこの貞享四年版『能訓蒙図彙』を参考にしている可能性すらあるとの伊藤正義氏からの御指摘もあった。

茂山久蔵英政は青造酒介盛重であったとしても、それ以上のものではないのかも知れない。しかし、筆者には青家代々の者が茂山姓

を名乗って狂言を演じていたとの可能性は残っていると思える。それは『禁裏仙洞御能記』に、久蔵英政が生まれる三年前の元文三年に茂山久蔵名が見られ、それは父親である可能性が高い。又、『花咲伝』には九歳の時から稽古を始めたところがあるが、それに該当する寛延元年（一七四八）には同じく『禁裏仙洞御能記』によれば、茂山久蔵名で〈棒縛〉〈河原太郎〉のオモを勤めている。これらの曲でオモを勤めるのは九歳の子供には重すぎる。久蔵という名も子供の名乗りとしては重い感じである。恐らくこの頃の久蔵は英政の親であって、英政が久蔵を名乗るのはもっとあとになってからのことであらう。この間の考証については付載の年譜を参照されたい。

ちなみに『禁裏仙洞御能記』には宝暦八年十月十五日の禁裏御所御内々御拍子で久蔵は左市なる者と「鏡」を演じている。「鏡」とは「鏡男」のことだろうとは思われるが、久蔵英政が鏡師であることを踏まえた極めて暗示的な狂言だと思えてくる。いづれにしても今のところ、久蔵以前では正徳三年（一七一三）の『禁裏仙洞御能記』による茂山源右衛門、貞享四年の『能訓蒙図彙』による茂山徳兵衛が茂山姓として記されているものでは明らかなものである。

以上の青家代々の者が茂山姓を名乗って狂言を演じていたとの仮説が当たっているなら、『茂山家過去帳』では久蔵英政は八代とあるので、それまでの青家の累代を辿ってみると、先の小林達雄説で

は初代家次・二代光家・三代光保・四代吉保・五代盛當・六代盛重・七代盛重・八代盛重となる。もともと鏡の研究者すらも累代の数え方が分かれているようなので、広瀬都撰説の木瀬淨阿弥を初代と数えるならば、二代家次となり、以下の代の数え方はずれてくることになる。

四、青家と鏡作神社

青家が鏡師であつたことを伝えるものとして、数十点の御所や著名神社に奉納した鏡の図面と縁起・由緒書がある。たとえば、卷子本無題一巻には「夫、青の社の由来をくわしくたづねたてまつるに、大和の国笠縫ノ里ニ石凝姥命、先祖ニ而おわします、青大明神と鎮座したてまつるも、石凝姥命みことの君も宮にて地神五代のはじめより鑑供之出は祖神也」とあり、『大和国城下郡鏡作大明神縁起』の跋文には「鏡作大明神ハかしこくも我青家の大祖神におハし坐か故に、往古より我家にも崇め尊みいつき祭る所也、抑、わか家の姓を青と称することハ縁起ニ所謂神池にすめる青龍より起りて、深きいはれあること、も也、故に家の紋所にも昔より三鱗を用ひ来れりとなん、又、鏡作の神秘法式も残らずわか家に伝へ来れる所也。永世子々孫々に至るまで恐美く謹みて神徳を仰ぎ、神秘法式を守りて、御鏡を造奉るべきことになん努めく忽になせそ、穴賢く」ともある。今回の調査で青家の家紋が青龍に由来する三鱗で

あることも新たに判明し、鏡を作る上での伝授事も実際はかに記されてある資料のことも興味が引かれるが、ここは先を急ぐ。

これら縁起に示す笠縫の里にある鏡作神社とは『全国神社名鑑』（昭和五十一年、史学センター）に照らし合わせるに鏡作坐天照御魂神社であるに違いないと踏んだ。過日、訪れ伺ったことである。神社が公にされている略由緒には「鏡作神社（延喜式内大社）は大和国田原本町の八尾にある。古事記、日本書紀には、鏡作りの元祖を石凝姥命となっている。鏡作神社の祭神は、石凝姥命と天照国照日子火明命、天児屋命の三神であつて、實際は、鏡作坐天照御魂神社といつて、平城天皇、清和天皇、醍醐天皇等、王朝の信仰があつて千二百年前からある由緒ある古社である」とある。石凝姥命とはいわゆる三種の神器のひとつである八咫鏡を作ったとされる。なお、周辺にある宮古の鏡作伊多神社、保津の鏡作伊多神社、小阪の鏡作麻気神社、石見の鏡作神社はすべて八尾の神社を本社とする末社であるということである。ちなみに御神体の鏡は『別冊太陽』二十七号（昭和五十四年六月二十五日、平凡社）にカラーで掲載されている。

先に紹介した青家に伝わる『大和国城下郡鏡作大明神縁起』は「夫其昔天地未分時」に始まる縁起であるが、その原本と思われるものが鏡作神社で拝閲したものの中にあつた。それは文明五年（一

四七三)の奥書があるもので、奥書にふさわしい古雅な卷子本である。しかし、青家にあった青家と鏡作神社の深い関わりを示す当該箇所は鏡作神社のものが末尾で切断されていることもあり、跋文はなかった。なお、問題のものは『続群書類従』巻第六十五に活字化されているが、それは永祿三年(一五六〇)の奥書のもので書き出しなどが異なる。ともかく、残念ながら神社側の資料・伝承には『田原本町史』に紹介されたものを含めて青家乃至茂山家に関わるものはいっさいないようである。

たゞ、能楽に関わる資料が一点判明したので、ここに紹介しておきたい。それは『大和八尾鏡作大明神祭禮作法』一巻で、天文十二年十月十三日の奥書を持つ。未紹介の資料と思われるので次に抜き書きして示す。

御祭神 四月九日 用明天皇

(中略)

三番ニ当屋へ八日之晩ニ杜僧、十二郡年寄、庄屋中迄モ不残

能組可仕事

(中略)

十一番ニ南都ノ来能、九日ニハ五番可仕者也、仍而十日ニ七番可有事

(中略)

御祭神 九月十三日

(中略)

七番 能見物仕、十二日五番、十三日七番

十四日五番可仕事

すなわち、天文十二年(一五四三)のころには、鏡作神社での四月と九月に行われる祭礼には二日から三日にわたって本格的な能が行われていて、それにはいわゆる南都称宜衆が携わって来演していたというのである。

五、演劇博物館所蔵の関連資料

平成八年十二月四日から九年一月十四日にかけて早稲田大学演劇博物館で「能楽資料展・能楽の六百年―中世から近代まで―」が開催された。竹本幹夫氏監修で出品目録も作成されている。本稿が出るころには詳細な目録が出るとも伺っている。その中で、茂山久藏英政に関わっていくつかの資料があることがわかったので付記したい。なお、標題は同展出品目録解題による。

a 金春能間語居語之分

133×195。103丁。但、前後に遊紙各二丁。虫損甚。茶覆表紙に「壺番／稽古・六儀／茂山久藏(花押)／金春能間語居語之分／四十三番揃／四冊之内／二冊ニテ都合九十四番終」とある。朱蔵書印「安田文庫」「松廬舎文庫」。久藏英政自筆とみて差し支えない。

b 茂山久藏伝書「旧正録」

英政自筆本ではなく、九世正虎が英政自筆を転写した上で、正虎自身が書き加えたものである。前掲、拙稿「茂山久藏英政伝一斑」で触れたので、ここでは詳細は省略するが、「元禄十四年京都大藏流指南家名寄」の項には次のようにある。

本多中務殿役者 油小路四条下ル丁 茂山徳兵衛／久藏事

その時には見落としていたのだが、元禄十四年（一七〇一）の茂山徳兵衛はつまり久藏のことであるというのである。「久藏事」とは、あるいは正虎の書き込みかも知れないが、代々久藏名を名乗っていたとの認識はあったものであろう。

c 倉谷本大藏狂言記

全二冊。奥書「文政三己卯春／倉谷氏」。倉谷は「花咲伝」に久藏英政が江戸で三年間修行していたころの師匠である倉谷武右衛門のこと。今、詳細は竹本氏の目録解題に譲る。

おわりに

以上、茂山久藏英政と鏡師青家の関係を述べてきた訳だが、まとめと今後の問題点を列挙してみる。

一、茂山久藏英政は「茂山家過去帳」で記す通り青道酒介盛重であった。墓は大谷本廟にある。

一、青家は代々続いた禁裏御用の鏡師であった。青家に伝来する鏡

文書は貴重な資料である。筆者は今のところ、本姓青の者が藝名茂山を名乗り、狂言師として御所御用を勤めたと考えておきたい。

一、茂山家の狂言師としての活躍は山脇和泉元宜と同じく手猿楽としての者であった。すなわち、本職が別にあり、狂言で以て御所御用を勤めるあり方は、京都における典型である。岡崎本多家との関わりも扶持を受けていたというだけの関わりであろう。一、青家の鏡師としての伝統は鏡作神社とも深い関係があるようである。

付、関連年譜（中略については拙稿「茂山久藏英政伝一斑」を参照されたい）

貞享4（一六八七）

「茂山徳兵衛」名、記載される。

〔能之訓蒙図彙〕

元禄14（一七〇一）

「茂山徳兵衛事久藏」と記される。

〔旧正録〕

正徳3（一七一三）

〈狂言舞〉に茂山源右衛門出演。

〔禁裏仙洞御能記〕

元文2（一七三七）

〈花折〉に茂山久藏出演。

〔禁裏仙洞御能記〕

5 (一七四〇)

久藏英政出生。

延享4 (一七四七)

〈千切木〉に茂山久藏出演。

〔禁裏仙洞御能記〕

寛延1 (一七四八)

久藏英政、狂言を学び始める。

〔花咲伝〕

宝暦2 (一七五二)

〈磁石〉に茂山久藏出演。

〔禁裏仙洞御能記〕

8 (一七五八)

〈鏡〉などに茂山久藏出演。

〔禁裏仙洞御能記〕

10 (一七六〇)

〔茂山久藏〕名、記載される。

〔能之訓蒙図彙〕

(中略)

文化9 (一八二二)

大谷本廟に墓を建立。

文政3 (一八二〇)

御所で八十歳の祝いあり。

文政4 (一八二二)

久藏英政没。

本稿を成すにあたり、青敬之氏・大谷本廟・鏡作神社・早稲田大学演劇博物館に特にお世話になった。記して感謝したい。

(せきや としひこ 関西大学教授)